# 樹木を介した欲望の表出と変身願望

## —— ロバート・ヘリックとアフラ・ベーン ——[1]

竹山　友子

## 1．はじめに

17世紀の詩人ロバート・ヘリック（Robert Herrick）の“The Vine”（1648）とアフラ・ベーン（Aphra Behn）の“On *a* Juniper-Tree, *cut down to make* Busks”（1680）にはともに，樹木を介した欲望の表出と変身願望のモチーフが見られる。二つの詩に描写される樹木と変身の結びつきについては，オウィディウス作『変身物語』やホラティウス作『諷刺詩』などローマ神話の影響が考えられる。特に初期近代英国においてはオウィディウスの『変身物語』の英訳版が盛んに出版され，1567年初版のアーサー・ゴールディング（Arthur Golding）による韻文訳は1612年までに7版を重ねた。17世紀に入るとジョージ・サンズ（George Sandys）による韻文訳が1626年に出版されて1656年までに6版を重ねた（Gillespie and Cummings 207-209）。[2]　また，ヘリックはホラティウスの『オード』の一部翻訳と『変身物語』を含めたオウィディウス作品を想起させる詩を作り，ベーンも同様にオウィディウスとホラティウスの著作一部のパラフレーズを著している。このように古典文学に強い関心を持つ二人がともに樹木を介した変身物語風の詩を創作し，その中で特に一人称の語り手が持つ感情と欲望の発露の手段として変身を用いている。本稿では語り手を始めとした登場人物の欲望—特に性的欲望—の表現を中心に，欲望の表現方法としての樹木を介した変身をジェンダーの問題と絡めながら考察する。

## 2．17世紀における樹木への関心と変容物語

樹木に関する変容物語として第一に挙げられるのは，広く有名なオウィディウスの『変身物語』である。17世紀の受容については前述の通り，1567年初版のアーサー・ゴールディング訳が17世紀に入っても版を重ね，その後ジョージ・サンズ訳も人気を博した。『変身物語』における樹木への変容で最も有名なものは，性

[1] 本稿は日本英文学会中国四国支部第68回大会シンポジアム（2015年10月25日於広島修道大学）において発表した「樹木を介した欲望の表出と変身願望」に加筆したものである。

[2] 16世紀後半から17世紀半ばまでのオウィディウスやホラティウス作品の翻訳についてはBraden, Cummings and Gillespie も参照のこと。

的脅威から逃れる手段として神の力を経た変容で，第1巻でアポロンの誘惑から逃れるために月桂樹に変身したダプネの話だろう。1637年にはこの話を題材にしてトマス・ヘイウッド（Thomas Heywood）が“Apollo and Daphne”という劇を発表している(Gillespie and Cummings 209)。『変身物語』第10巻では，妻を失ったオルペウスを慰めるべく，かつてのダプネであった月桂樹を始め，人間やニンフから変身した様々な木が一堂に会するが，その数はざっと20種類を超える。『変身物語』における樹木の変容の重要性を表していると言えるだろう。

そして同じくローマ詩人のホラティウスによる『諷刺詩』第１巻８章にも樹木の変容物語が描かれている。これは1567年にトマス・ドラント（Thomas Drant）の訳で，17世紀では1666年に５人の人物による共同訳が，さらに1684年にはトマス・クリーチ（Thomas Creech）による訳が出版されている。以下はクリーチ訳で，冒頭には“Priapus *tells how He came to be a God*.”という見出しが付けられている。[3]

Long time I lay a *useless* Piece of Wood,
Till Artists doubtful for what the *Log* was good,
A *Stool*, or *God* [Priapus]; resolved to make a God:
So I was made, my Form the *Log* receives,
A mighty Terror I to Birds and Thieves:
My Hook and my vast Pole the Thieves affright,
And keep the Garden safe from Rogues by night:
My gastly Head is Crown'd with staring Reed,
To fright the Sparrows from the new-sown Seed; (*SATYR* I. VIII, ll. 1–9)

長らく役立たずの木材“a *useless* Piece of Wood”（l. 1）であった話者が，職人の手によって男根を象徴する豊穣の神プリアポスの姿となり，単なる案山子ではなく庭を守る神として自らが語り手となってその経緯とその後の出来事を語る話である。オウィディウスの『変身物語』と違ってホラティウスの『諷刺詩』の場合は，樹木への変容ではなく，もともと樹木だったものが別の形―守り神へと変容して新たな力を得るというものである。

[3] クリーチ訳はそれ以前の訳よりラテン語原書に忠実である。ヘリックの詩集は1648年の出版だが，聖職者でケンブリッジ大学の修士号を持つヘリックはラテン語に堪能で原書を読んだと考えられている。『ヘスペリディーズ』にはオウィディウスやホラティウス作品の一部翻訳を含む詩が散見される。またベーンについて Stapleton は，友人であるクリーチの助けを借りて原語で読んだ可能性が高いと主張する（147）。またはクリーチの翻訳原稿を読んだ可能性もある。

初期近代の英国は，ヘンリー８世以降の宮廷庭園の発展から17世紀のピューリタン台頭に伴って，菜園や果樹園などの実利的な庭園が好まれるようになった。植物の名前，外観，特質，効能などを記した「ハーバル」と呼ばれる本草誌や，園芸技術を伝える「ガーデニングブック」なども盛んに出版された。また，森林伐採による木材不足が叫ばれるようになり，1664年には王立協会の要請を受けてジョン・イーヴリン（John Evelyn）が森林論 *Silva, or A Discourse of Forest-Trees and the Propagation of Timber* を出版してチャールズ２世に献呈している（中山104-105）。1668年にはエイブラハム・カウリー（Abraham Cowley）がラテン語で *Plantarum libri sex*（*Six Books of Plants*）という草本誌を模倣した詩集を出版した。[4] この詩集は２巻で１つのテーマを扱い，薬草，花，木について語られるが，その中の一部の草木や樹木については，オウィディウスの『変身物語』を下敷きにしている。

## ３．ロバート・ヘリック“The Vine”（1648）の考察

ロバート・ヘリックはケンブリッジ大学を卒業後に英国国教会の執事，その後司祭となり，その間に膨大な恋愛詩および宗教詩を執筆する。1647年に王党派ゆえに司祭の職を解かれ，その翌年1648年に約1400編の詩を集めた詩集『ヘスペリディーズ』を出版する。『ヘスペリディーズ』は表紙にオウィディウスの『恋の歌』からの引用文「詩だけが貪欲な火葬場の薪を逃れる」（Book III, Elegy IX）の文言と王冠の絵をあしらい，チャールズ皇太子（後のチャールズ２世）への献辞を巻頭に置く。

膨大な詩群の中にはオウィディウス作品を参考にしたものも散見され，“To His Mistresses”という詩では『変身物語』のイアソンの老いた父を若返らせたメデイアの話を採り入れている。そして今回のテーマ，樹木にかかわる変容物語がモチーフとなっているのが“The Vine”で，夢の中で話者がブドウの木に変身して，女性の体に巻き付いていく話である。

> I dreamt this mortal part of mine
> Was metamorphos'd to a vine;
> Which crawling one and every way
> Enthrall'd my dainty Lucia.  (ll. 1-4)

『変身物語』で恋する相手を手に入れるために雄牛や白鳥に変身したユピテル同

[4] 最初の２巻は1662年に出版されている。

様に，“The Vine”の話者は夢の中でブドウの木に変身（“metamorphos'd”）して，愛する女性 Lucia を手に入れようと彼女の身体全体に巻き付いていく。そして最終的に Lucia は身動きが取れなくなる。

So that she could not freely stir,
All parts there made one prisoner.
But when I crept with leaves to hide
Those parts, which maids keep unespy'd,
Such fleeting pleasures there I took,
That with the fancy I awoke;
And found, ah me! this flesh of mine
More like a stock than like a vine. (ll. 16–23)

Lucia はまるで“one prisoner”（l. 17）となって身動きが取れずに拘束される。そしてブドウの木となった話者はついに女性たちが人目に触れさせないあの部分“Those parts, which maids keep unespy'd,”（l. 19）に巻き付いて葉で覆い隠すと，一瞬の快感を味わってすぐに目覚める。しかし目覚めたとき，自分の身体が“a vine”ではなく“a stock”（l. 23）のような状態であることに気付いて思わず“ah me!”（l. 22）と声を上げるところで詩は終わる。この詩のポイントは，最後に話者がどのような状態に陥ったのかということである。William Kerrigan は，女性が隠そうとする“Those parts”（l. 19）は胸と生殖器の両方を読者に想像させて，“stock”はペニスの勃起を，“ah me!”は後悔の念を表すと主張する（164–66）。つまり勃起をした状態で Lucia との結合を果たせないままに夢から締め出されたこと，夢の中とはいえ性交渉が失敗に終わったことを悔やんだということである。

ブドウの木（vine）は，オウィディウスの『変身物語』第14巻においては楡との結合によって結婚を象徴する樹木として描かれている。第３巻では少年時代のバッコスがブドウの木を頭に巻いている様子が描がれる。[5] さらに第11巻では，バッコスは自分を称える詩人オルペウスを殺した罰としてトラキアの女達を樹木に変身させる。1567年出版のゴールディング訳では女性達が変容する様は“turning into woode”（*Metamorphoses* 275）と描写されている。バッコスはブドウ酒の神であるため，『変身物語』においてブドウの木は酒，恋愛，樹木（wood）への変容に結びつくのである。

[5] Kerrigan も“The Vine”における Lucia と『変身物語』第３巻におけるバッコスの姿との類似を示唆している（165）。

ヘリックの“The Vine”にもバッコスは登場し，話者であるブドウの木に頭まで巻き付かれたLuciaは“Young Bacchus ravish'd by his tree”（l. 13）と喩えられる。ravishedは「魅了された」だけでなく「陵辱された」の意があり，Luciaの状態の比喩としては「自分の木，つまりブドウの木に陵辱された若きバッコス」とするのが自然だろう（“ravish”def. 2b）。女性であるLuciaが陵辱された男性神に喩えられるのは両義的である。ブドウの木に巻き付かれる（陵辱される）樹木に見立てられる点で，樹木に変身させられたトラキアの女達と同等である。その一方で，ブドウの木を身体（頭）に抱くバッコスと同じように，対象を樹木に変身させる能力が備わっていることをも暗示する。ヘリックはバッコスに女性性を与えることによって，男性神の持つ変身（する / させる）能力とそれが体現する男根崇拝を諷刺していると言えよう。

この詩の冒頭で巻き付くブドウの木となった話者は，最後には期待と欲望の大きさゆえか“stock”（l. 23）のようになる。OEDの定義によるとstockは“A log, block of wood”（def. 1b）となる。自由に動くことで実を結ぶブドウの木だったはずが，最後は丸太・木材のようになって身動きが取れなくなったと考えられる。この木材（log, wood）の状態は，ホラティウスの『諷刺詩』において男根を象徴する神でありブドウ畑の監視者で，さらにはギリシャ神話ではバッコスの息子とされるプリアポスが，神に変身する前の役立たずの木材“a *useless* Piece of Wood”（l. 1）または“the *Log*”（l. 2）だった状態を想起させる（“Priapus (Priapos)”）。また，“Young Bacchus”に喩えられたLuciaの持つ「対象を樹木に変身させる能力」の発揮と考えられる。ヘリックの詩においてはvineという木（蔓）への変容と最後の木材（log, wood）への退行的な変容は，オウィディウスの『変身物語』とホラティウスの『諷刺詩』に描かれる性的欲望と深く結びついた変身のモチーフを秘めた，男性神および男根崇拝の諷刺となるのである。

## 4．アフラ・ベーン“On *a* Juniper-Tree, *cut down to make* Busks”（1680）の考察

王政復古期の女性詩人アフラ・ベーンは，1670年以降ロンドンで人気劇作家として活躍し，*The Rover*（1677）を初めとして20作近い劇作品が上演・出版され，英国初の女性職業作家と称される。1680年以降になると劇以外に詩，散文小説，翻訳作品も執筆・出版された。ベーンもヘリック同様にオウィディウスやホラティウスの影響を受け，オウィディウスの『名婦の書簡』の一部をパラフレーズ化した“A Paraphrase on Oenone *to* Paris”やホラティウスの模倣詩“*In Imitation of* Horace”を発表している。そして1684年に出版されたベーンの詩集 *Poems upon Several Occasions* に収録されている“On *a* Juniper-

Tree, *cut down to make* Busks”は，オウィディウスの『変身物語』を想起させる詩である。[6] この詩は実際には1680年に出版されたロチェスター伯ジョン・ウィルモットによる同名の *Poems upon Several Occasions* に収録されているため，本来の発表年は1680年である（Behn 386-87）。

詩の場面設定は牧歌風恋愛詩の典型で，木陰で一組の若い男女が密会して愛を確かめ合うが，最終的に二人は別れるという筋である。しかしこの詩は単なる牧歌風恋愛詩ではない。話はさらに続き，恋人と別れて後に残された木に哀れを感じた女性が，木を切ってその木からコルセットを作るというものである。さらに特徴的なのは，この詩の話者が恋人達に逢瀬の場を提供した杜松の木（Juniper）であり，ホラティウスのプリアポスやヘリックの“The Vine”の話者同様に，話者が自らの変身物語を語るという設定である。“On *a* Juniper-Tree”では堂々とそびえ立つ杜松の木の元に一組の恋人フィロクレスとクローリスがやって来て，木陰で愛を確かめ合う様子が語られる。しかしこの木は単なる傍観者ではない。

My Grateful Shade I kindly lent,
And every aiding Bough I bent
So low, as sometimes had the blisse
To rob the Shepherd of a kiss,
Whilst he in Pleasures far above
The Sence of that degree of Love:
Permitted every stealth I made,
Unjealous of his Rival Shade. (ll. 33-40)

“My Grateful Shade I kindly lent,”（l. 33）とあるように，杜松の木が二人の恋愛に自ら手を貸すことが語られる。杜松の木はさらに二人の関係に踏み込んで羊飼いの男性からキスを盗む，つまりフィロクレスが気づかぬ間にこっそりと枝をたわませてクローリスにキスをする光景を語る。杜松の木はフィロクレスの“Rival Shade”（l. 40）となるとともに，この場面でこの木がクローリスに対して好意を抱いていることが明らかになる。そして木は恋人達の様子をさらに詳しく説明する。

I saw ’ em kindle to desire,

[6] Stapleton 146-47も参照のこと。Stapleton はベーンの“On *a* Juniper-Tree”に影響を与えた作品として，テオクリトス著『牧歌』第24歌，カウリー著 *Plantarum libri sex*（1668），ホラティウス著『諷刺詩』第２巻８章（第１巻８章の誤り）を挙げている。

Whilst with soft sighs they blew the fire:
Saw the approaches of their joy,
He growing more fierce, and she less Coy,
Saw how they mingled melting Rays,
Exchanging Love a thousand ways. (ll. 41–46, underlines mine)

恋人達の気持ちが高ぶる様子を語るのに客観的な三人称ではなく，一人称による“I saw”または“Saw”という言葉を挿入することにより，一連の描写が杜松の木の主観的表現となる。恋人達の行為を杜松の木の目を通して表すことにより，Elizabeth V. Young が述べるように「覗き行為の持つエロティックなスリル」(527) が感じられる。

しかしその後恋人達には別れが訪れる。その時二人は木々に感謝するが，特にこの杜松の木に最大の感謝の念を示す。そしてクローリスは木を撫でて，フィロクレスは木の根元，恋人達の枕だった場所にキスをする。

Their Gratitude to every Tree
They pay, but most to happy me;
The Shepherdess my Bark carest,
Whilst he my Root, Love's Pillow, kist; (ll. 80–83)

“carest”(l. 82) と“kist”(l. 83) はいずれも恋人達の愛情交換を表す語でもあり，まるで人が自分の恋人に別れを惜しんでいるかのような表現である。実際に杜松の木がクローリスにキスをしたように，実は恋人達もこの木を恋愛行為の参加者と見なしていたのではないだろうか。

二人が去って残された杜松の木は“My Grief must be as great and high”(l. 88) と言って恋人達との別れを悲しむが，同時に“No more a joyful looker on”(l. 93)「もはや喜びにあふれた観察者ではない」こと，つまり恋愛の覗き行為ができなくなることを悲しむ。しかしこの木を哀れに思ったクローリスは，木を切り倒してコルセットに作り替える。

With grief I bow'd my murmuring Head,
And all my Christal Dew I shed.
Which did in *Cloris* Pity move,
(*Cloris* whose Soul is made of Love;)
She cut me down, and did translate,

My being to a happier state.
・・・・・・・・・・・・・・・・・
My body into Busks was turn'd:
Where I still guard the Sacred Store,
And of Loves Temple keep the Door. (ll. 95-100, 106-108)

杜松の木は樹木からコルセットに変身してクローリスの“the Sacred Store”（l.107）を防護し，愛の神殿の扉を守るという新たな役目を与えられる。そしてその状態を“a happier state”（l. 100）と語るのである。

オウィディウスの『変身物語』第3巻で木々の役割を「たくさんの人（恋人達）にとっての隠れ場であり逃避の場である」と述べる箇所があるが（*Metamorphoses* 76），杜松の木は恋の終わりとともにその役割を終え，女性の身体を保護する役割を担ってその身体に密着する下着に変化する。以前のありのままの樹木の姿でいた時よりも，男性による性的脅威から女性を守る人工物となった状態を“a happier state”（l. 100）と感じている（Keith 97）。また“the Sacred Store”（l. 107）は「聖なる秘宝」の意味だが，“Store”は本来貯蔵庫であり，作物や果実を守る場所という意味にもなる（def. 6; def. 1）。これは，ホラティウスの『諷刺詩』における変容，つまり人間の手により木材が庭園やブドウ園の守り神へ変容したことに似ている。さらに杜松の木（Juniper）はその実を棘のある葉で保護することから貞節や永遠を表す木とされている（Impelluso 66）。このことは杜松の木が女性の守り神としての潜在的な役割を持つことを意味する。コルセットに変容後の役割は，オウィディウスの『変身物語』におけるダプネに象徴される樹木変容の役割―性的脅威からの女性保護となる。ヘリックの“The Vine”では樹木への変容は男性の視点による性交渉の失敗に繋がるが，ベーンの“On *a* Juniper-Tree”では女性寄りの視点から見た性交渉に対する防御と結び付く。それぞれの視点は違うが，樹木の変容が男性性の象徴でもある性交渉の成就を否定するという点において，二つの詩は共通している。

ベーンの女性的視点という部分に焦点を当てると，初期近代のコルセット（busk）には否定的な見方があり，それは女性の妊娠を妨げ女性が自由に行動できる，つまり女性が自分の身体をコントロールする力を得るというものだった（Feinstein 66）。クローリスは自分の身体をコントロールする力を得るために，自分に好意を寄せていた杜松の木を変身させたと言える。オウィディウスの『変身物語』では変身させる能力を持つのは神だけである一方で，ホラティウス『諷刺詩』では人間が木を変容させて守り神を生み出す。ホラティウス同様に変身させる力を作者ベーンは人間に与えるが，その相手は女性である。ヘリックがバッ

コスに喩える女性 Lucia にも変身させる力があることが暗示されるが，Lucia 自身も変身や陵辱の対象となっていて主体性はない。ベーンはクローリスの変身させる能力を表す際に，transform, transfigure, metamorphose など変形・変身に相当する後がいくつかある中で，“translate”（l. 99）という語を選択している。この語は翻訳者（translator）でもあったベーン自身の役割を意識させ，クローリスと作者の一体化に繋がる。[7]『変身物語』では神が,『諷刺詩』では男性が持つ，新たな力を生み出す変身能力をベーンは女性に与えたのである。

## 5．話者の問題

オウィディウスの『変身物語』では樹木に変身した者たちは一様に変身後に声を失う。一方で，ホラティウスの『諷刺詩』では話者のプリアポスは，樹木そして木材（log, wood）からプリアポス神に変身後に，庭を監視する力と語る声を得る。ヘリックの“The Vine”でもブドウの木に変身後は行動力も語る声もあったが，木材（stock=log, wood）のようになった一種の退行的変容後は“ah me!”という言葉を最後に，声も行動力も失う。さらに話者がブドウの木となって巻き付く女性 Lucia には声も主体的行動力もない。[8]“The Vine”の話者は女性を愛する男性で，作者と同一または非常に近い距離にいると思われる。詩集『ヘスペリディーズ』には本文中に“Herrick”自身が登場する詩が18編あり，それ以外にも自伝的要素を盛り込んだ詩が含まれており，詩人と詩の話者の境界が曖昧である。ヘリックは師と仰いだベン・ジョンソンの古典主義に影響を受けてホラティウスやアナクレオンに倣って詩作したとされるが（Rollin 166–67; 石井16–17），ホラティウスの『諷刺詩』や『オード』には自己嘲笑や自伝的要素を含んだ詩が見られる（Martindale 64–83）。ヘリックの“The Vine”はエロティックな性交渉を想起させて読者を刺激しつつ，変身によって語る声を与えられた話者の膨らんだ欲望とその語りを結末で突然取り上げる。ホラティウスの手法と同じように，ヘリックも欲望と結末の落差を自己嘲笑していると考えられる。

一方，ベーンの“On *a* Juniper-Tree”における話者について，詩はすべて過去形で語られているため杜松の木の語り手としての声は変身後に与えられたと思

---

[7] ベーンはカウリーのラテン語詩 *Plantarum libri sex*（*Six Books of Plants*）のうち，樹木をテーマとした第６巻 Silva を英訳している。その中で“Let me with *Sappho* and *Orinda* be / Oh ever sacred Nymph, adorn'd by thee; / And give my Verses Immortality”（ll. 592–94）の文言を挿入して，翻訳作品を自分の作品と称して詩人の称号を要求する（Uman *Women* 104）。さらにこの箇所にベーン自身による余白註“The Translatress in her own Person speaks”を付記し，この部分が翻訳者としての自分の意見であることを強調する（Uman“Aphra”353）。

[8] Hammons は“The Vine”では女性に主体的行為が与えられていないと主張する（61, n. 50）。

われる。コルセットとなった後は自ら動く力はなくともプリアポスのように守り神として，危険な男性を排除して花や果実と称される女性の貞節を守る力，一種の神性を得る。しかしその変身は読者をさらなるエロティシズムへと誘う。一人称の話者である杜松の木は変身前に，“I saw”（l. 41）という言葉で恋人たちの行動を覗き見するエロティックな覗き行為に読者を導く。コルセットに変身後は下着となってクローリスの身体を見守る，つまり「見て」守るという覗き行為が継続されるばかりか，常に身体に触れながら守ることで，読者のエロティックな想像力をさらに刺激することと女性の節度を守ることの相反する目的を同時に達成するのである。

ベーンは，聖職者だったヘリックと違って生活のために執筆する職業作家であった。特に劇作家として人気を得て，劇団や観客からの要請を考慮して執筆していたようである。ベーンが活躍した王政復古期は，共和制時代のピューリタニズムからの反動で肉体的快楽を追求するリバティニズムが宮廷を中心に広がり，舞台で女性を演じるのも少年俳優ではなく生身の女性，女優だった。ベーン自身も女優のセクシャリティを全面に出す劇を生み出している。また，詩集 *Poems upon Several Occasions*（1684）出版に際し，手紙で出版者 Tonson に報酬増額を要求している。

> I wish I had more time, I wou'd ad something to the verses that I have a mind to, but, good deare Mr. Tonson, let it be 5 pound more, for I may safly swere I have lost the getting of 50 pounds by it, tho nothing to you, or to my satisfaction and humour; but I have been without getting so long that I am just on the poynt of breaking especially since a body has no creditt at the Playhouse as we used to have, fifty or 60 deepe, or more; I want extreamly or I wo'd not urge this. (qtd. in Todd, *Secret* 325)

詩集の出版はベーンにとっては金銭を稼ぐ手段であり，劇団統合前後からの新作劇減少に伴って激減した劇作収入の代わりとなっていたのである（Todd 297）。ベーンにとって樹木の変容物語は，樹木への社会的な関心の高まりと，リバティニズムによって肉体的快楽やエロティシズムが注目を集めた時代に，古典文学を想起させながら性的欲望の表出を描いて読者の関心を惹きつける格好の手段だったに違いない。古典主義，特にホラティウスのモチーフと手法に倣って男根崇拝を諷刺的に描くヘリックの“The Vine”と違い，ベーンの“On *a* Juniper-Tree, *cut down to make* Busks”は同じくオウィディウスやホラティウスの変身モチーフを利用しながら，それは女性（ベーン）が書いた女性（クローリス）による女

性（クローリス）のための樹木変身物語であると同時に，男性読者のエロティックな要望にも応える作品へと「変身」を遂げているのである。

関西学院大学

## Works Cited

Behn, Aphra. *The Works of Aphra Behn*. Ed. Janet Todd. Vol. 1. Columbus: Ohio State UP, 1998.

Braden, Gordon, Robert Cummings and Stuart Gillespie, eds. *The Oxford History of Literary Translation in England. Volume 2 1550-1660*. Oxford: Oxford UP, 2010.

Cowley, Abraham. *The Third Part of the Works of Mr. Abraham Cowley Being his Six Books of Plants, Never before Printed in English*. Trans. J. O. (I, II), C. Cleve (III), Nahum. Tate (IV, V) and Aphra Behn (VI). London, 1689.

Feinstein, Sandy. "Donne's 'Elegy 19' : The busk between a pair of bodies." *Studies in English Literature, 1500-1900* (SEL) 34 (1994): 61-77.

Gillespie, Stuart, and Robert Cummings. "A Bibliography of Ovidian Translations and Imitations in English." *Translation and Literature* 13 (2004): 207-18.

Hammons, Pamela. "Robert Herrick's Gift Trouble: Male Subjects 'Trans-shifting' into Objects." *Criticism* 47 (2005): 31-64.

Herrick, Robert. *The Hesperides & Noble Numbers: Edited by Alfred Pollard with a Preface by A. C. Swinburne*. 2 vols. London: Lawrence & Bullen, 1898. The Project Gutenberg. 30 May 2015.

Horace (Quintus Horatius Flaccus). *The Odes, Satyrs, and Epistles of Horace*. Trans. Thomas Creech. London, 1684. EEBO.

_____. *The Poems of Horace consisting of odes, satyres, and epistles: rendred in Engish verse by several persons*. Trans. Alexander Brome, Richard Fanshawe, T. H. (Thomas Howkins), John Dunstall, and David Loggan. London, 1666. EEBO.

_____. SERMONVM Q. HORATI FLACCI LIBER PRIMVS. The Latin Library. <http://www.thelatinlibrary.com/hor.html>. 9. Mar. 2016. Web.

Impelluso, Lucia. *Nature and Its Symbols*. Trans. Stephen Sartarelli. Los Angels: J Paul Getty Museum Pubns, 2004.

Keith, Jennifer. *Poetry and the Feminine from Behn to Cowper*. Newark: U of Delaware P, 2005.

Kerrigan, William. “Kiss Fancies in Robert Herrick.” *George Herbert Journal* 14 (1990): 155–71.

Martindale, Joanna. “The Best Master of Virtue and Wisdom: The Horace of Ben Jonson and His Heirs.” *Horace Made New: Horatian Influences on British Writing from the Renaissance to the Twentieth Century*. Ed. Charles Martindale and David Hopkins. Cambridge: Cambridge UP, 1993.

Ovid. *The Love Books of Ovid* (*The Amores*). Trans. J. Lewis May. Internet Sacred Text Archive. 28 Sep. 2015. Web.

_____. *Ovid's Metamorphoses: The Arthur Golding Translation of 1567*. Ed. John Frederick Nims. Philadelphia: Paul Dry Books, 2000.

_____. *Ovid's Metamorphosis Englished Mythologiz'd and Represented in Figures*. Trans. George Sandys. Oxford, 1632. <http://ovid.lib.virginia.edu/sandys/contents.htm> . Web.

“Priapus (Priapos).” Theoi Greek Mythology: Exploring Mythology in Classical Literature & Art. <http://www.theoi.com/Georgikos/Priapos.html>. 5 Oct. 2015. Web.

“Ravish.” *Oxford English Dictonary*. 2nd ed. CD-ROM. Version 4. 2009.

Rollin, Roger B. *Robert Herrick: Revised Edition*. New York: Twayne Publishers, 1992.

Stapleton, M. L. *Admired and Understood: The Poetry of Aphra Behn*. Newark: U of Delaware P, 2004.

“Stock.” *Oxford English Dictonary*.

“Store.” *Oxford English Dictonary*.

Todd, Janet. *The Secret Life of Aphra Behn*. London: Pandora, 2000.

Uman, Deborah. *Women as Translators in Early Modern England*. Newark: U of Delaware P, 2012.

_____. “Aphra Behn, Cowley's Of Plants. Book VI. ‘Of trees’ (1689).” *Reading Early Modern Women: An Anthology of Texts in Manuscript and Print, 1550–1700*. Ed. Helen Ostovich and Elizabeth Sauer. New York: Routledge, 2004. 352–53.

Young, Elizabeth V. “Aphra Behn, Gender and Pastoral.” *SEL* 33 (1993): 523–43.

石井正之助. 『ロバート・ヘリック研究［増訂版］』 東京・研究社　1985年.

中山理. 『イギリス庭園の文化史：夢の楽園と癒しの庭園』 東京・大修館書店 2013年

# Expressions of Desires through Trees and Metamorphoses: Robert Herrick and Aphra Behn

Tomoko Takeyama

Two seventeenth-century poems, "The Vine" (1648) by Robert Herrick and "On *a* Juniper-Tree, *cut down to make* Busks" (1680) by Aphra Behn, share the same motif: expressions of desires through trees and metamorphoses. Regarding this association, these poems are considered to be influenced by Roman myths such as *Metamorphosis* by Ovid and *Satyrs* by Horace. In particular, translations of Ovid's *Metamorphosis* were published frequently in early modern England, including several editions of verse translation by George Sandys. Herrick translated some of Horace's *Odes* and wrote poems which remind the readers of Ovid's works including *Metamorphosis*. Behn also paraphrased some writings by Horace and Ovid. Thus, interested in the classical literature, both Herrick and Behn created poems with hues of metamorphoses through trees, utilizing them as a tool of showing the emotions and desires of their first-person narrators.

This paper focuses on the expressions of emotions and sexual desires of the main characters, in particular, narrators who are transformed from and/or into trees. This study should be viewed through the paradigm of gender issues and the clarification of the aims of the two writers. First, I will explicate the reception of metamorphoses through trees as well as the growing interest in trees and woods in early modern England. Transformations from and/or into trees are described not only in Ovid's *Metamorphosis* but also in Horace's *Satyrs*. Both volumes were popular and published in several editions in this period. Surging attention to trees and woods led to a rise in the number of publications of practical guidebooks such as herbals and gardening books. There were also strong concerns about the shortage of trees and woods due to deforestation.

Second, I will examine Robert Herrick's "The Vine" published in *The Hesperides and Noble Numbers* in 1648. A male narrator has a dream that he is transformed into a vine and then winds around a naked woman. The male narrator in a figure of the vine expresses his sexual desire twining around a female body. To his great disappointment, he awakes from his dream just

before he satisfies his desire. The narrator's transformation has some similarities to some transformed trees in Ovid's *Metamorphosis* as well as Priapus in Horace's *Satyrs* I. VIII. It is clarified that the narrator gains sexual power by transformation into a tree but also loses it by another transformation from a tree.

In the next section, the discussion proceeds through close examination of Aphra Behn's "On *a* Juniper-Tree, *cut down to make* Busks," which was first published in 1680. The narrator of this poem is a juniper tree, which tells about the secret meetings of a pair of young lovers under itself. After the couple stop seeing each other, the deserted tree is transformed into a busk (corset) by the female lover who feels sympathy toward it. The study focuses on the narrator's expressions of its desires and its changing roles in relation to the female character. As in Herrick's "The Vine," the roles of the tree are similar to those of some trees in Ovid's *Metamorphosis* as well as that of Priapus in Horace's *Satyrs*.

In the final section, the argument continues about changes in the narrators' voices to express their sexual desires before and after the transformations in both poems. Both narrators in Herrick's "The Vine" and Behn's "On *a* Juniper-Tree" gain sexual power through transformation. However, the conclusions of both poems are different. The narrator in Herrick's "The Vine" loses the sexual power after another transformation. On the other hand, the narrator in Behn's "On *a* Juniper-Tree" exercises its sexual power not for a man's but for a woman's benefit. In addition, a consideration of social background in seventeenth-century England indicates the reason why these poems end differently with the same motif of metamorphoses through trees. As a male priest-poet influenced by classicism, Herrick probably utilized the Horatian technique of self-mockery, which is shown in *The Satyrs*. For Behn, a female professional writer in the Restoration period, a motif of metamorphoses through trees must have been a useful tool to express sexual desires through trees in order to attract readers in the period of libertinism and the growing interest in trees.

*Kwansei Gakuin University*